

している。

×

×

×

“定年になるのを淋しがる人もあるようだが自分は早く暇になって、心ゆくまで実験をしたい”とおっしゃったことがあった。これは高校長在任中のとくに雑用が多かったところのお言葉だが、退官されたあとこの希望をどのように実現して行かれるのか大いに期待しているところである。

## 浅井辰郎先生御退官記念号にことよせて

渡 辺 光

旧臘、お茶の水女子大学地理学教室からの来翰により、浅井先生の御退官の間近いことを悟り、今更乍ら月日の経過の早いことを思い知らされた次第である。大方も御存知ではあろうが、御着任当時先生は既に完成した学者としての名声と地位とが共に確立しておられたにも拘らず、任せて本学にお出でを願ったのである。いま当時の事情を振り返って見ると、本学は大学昇格以後次第に内容の充実を見つあつたとは言え、まだ大学院の設置やその他の条件に於て、旧制大学に比して格段の遜色があつたことは否めなかつた。同時に、地理学教室にあつても、将来の相当長期に亘る期間に指導的な役割を果たして戴く方をお迎えして置くことの必要性が痛切に感ぜられていた時期でもあつたのである。

このような、完成された指導性の豊かな方をお迎えすることは、どの学問の分野でも困難なことは言うまでもないが、地理学はこの感を特に深くする分野である。それは地理学の内容の本質に根ざしていることによるからである。

昔から言われていることではあるが、地理学の内容には二つの、一見相容れない観のある分野がある。一つは数理的伝統 *Mathematical tradition* に属する方面であり、いま一つは文章の伝統 *Literally tradition* の方面である、しかもこの両分野の調和のとれた融合の上こそ、地と人とを一つとして見ることを通しての地域性の解明や、地域間の比較、関係を考察すること、すなわち、*Ritter* 以来の地理学の基本概念である *Landschaftsbegriff* (*regional concept*, 地域概念) に基づく考察対象の地理学的考察がはじめて可能であるからである。

幸いにして浅井先生は夙にこのような識能を十二分に具備された方である。このことは、先生の天賦の才に因られることは言うまでもないが、履歴も大きく与っているものと思われる。幼にしては日本の地理学界の黎明期の学界の先達であられた敵父治平先生の膝下にあり、京都大学文学部史学科に学んでは、人文地理学の教室にあつて、修辞学に特に厳格な小牧実繁教授の薫陶の下に地理学の研鑽を積まれる傍、学部の壁を越えて理学部と深い接触を保ち、特に地球物理学教室の気象学担当の滑川教授からは基礎、応用方面に亘る万遍なき指導を享けた。浅井先生の後年の完成された地理学者としての基礎には、このような長きに亘る基礎固めがあつたのである。

実は、先生を本学にお迎えしたいという希望は、御着任の2年程前から抱かれていたが、諸般の事情を考察すると、到底不可能ではないかと半ば諦めていた。しかし相当の無理を押しをお願いした結果、前任校法政大学の寛大な御容認によって本学へのお迎えが実現したのである。今定年御退官を迎

えられるに当り、当時を回想して感無量である。尚老齢とは申し上げられない先生には、今後の一層の御活躍を期待する次第である。

## 地理学教室人名考 日本 の 風 土

正 井 泰 夫

私がお茶大地理学科へ勤め始めたのは、昭和39年7月のことだった。当時は、渡辺光・松井勇・浅海重夫・式正英諸先生と貝山久子・岡崎セツ子のお2人の助手から教職員組織が成り立っていた。それに私が加わったわけであるが、もうこれだけでも、人名における混乱が起ったのである。いうまでもなく、マツイ・アサミ・マサイという名が混乱の基であった。

ある時、今は亡きスイスのベッシュ先生から手紙がきた。先生と私は、それより10年以上も前に秩父の山へ案内させていただいたり、また、その5年ほど前にアメリカでお会いしたことがあったのであるが、何とその手紙の中に、私を戦前からお知りであった、しかも計量地理学的手法の面である。いうまでもなく、松井先生と「光栄にも」間違えていただいたのであった。

その後、浅井辰郎先生が来学され、人名混乱がますます加わった。何しろ、人文地理学講座がマツイ・マサイ、自然地理学講座がアサイ・アサミであり、地誌学講座のみ、ワタナベ・シキという明瞭に識別できる組合せだったのである。マツイ・アサイ・アサミ・マサイは、特に電話の応対の場合に混同が多く、たくさんの方が困ったはずである。

これら4人の姓名は、漢字で書いても、共通点が多い。4人中3人は「井」をもち、2人は「浅」をもっていたからである。ローマ字にすると、もっとややこしい。Matsui, Asai, Asami, Masaiは、Maで始まるのが2人、Aで始まるのが2人、iで終るのは全員、最初のシラブルの母音は全員がa、さらに全員がsを含み、また3人がmを含むといった類いである。ベッシュ先生が間違えられたのも無理はない。

浅井先生は地名（アイスランド地名）を研究されているが、私も関心をもっている。日本人の姓名が地名と密接な関係にあることはよく知られている。考えてみると、渡辺・式両先生の姓を別とすると、松井・浅井・浅海・正井、それに貝山という姓は、すべて自然に直接に関連している。しかも、現代日本語で誰にでもすぐ分る意味を示しているのであり、日本人の姓名の研究によって、日本の風土の一端を明らかにすることができるだろう。

話を本題に戻そう。渡辺先生が退官されてから、内藤博夫先生がこられた。しかし、例の4人の混乱名はそのままである。そして、今度は松井先生が退官されたが、次にこられたのが斎藤功先生である。内藤・斎藤、何と似ていることか。片仮名でナイトウ・サイトウと書いてみると、もっとよく似ている。私が昭和50年中に転勤した後こられたのは、井内昇先生である。正に尻とりゲームのように「井」が両者についている。「井」は、現在は井戸という意味に解されているが、もともとは泉という意味であった。井だけでなく、川・河・池・泉・津・沢・田のように、自然の水と直接関連した姓名は非常に多い。地名も同様である。これは、日本が水に恵まれているからなのだろうか。砂漠地域